
今世は、岩です。

夢禮

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今世は、岩です。

【著者名】

Z0361BA

夢禮

【あらすじ】

事故により、よくある転生を果たしたのですが、なぜか動けないのですが。はい？私、・・・岩なんですか？

(前書き)

平安時代を舞台にしていますが、忠実ではありません。無理、という方はお戻りください。

わーい、転生したぞ。

ほらテンプレってやつ。よくある交通事故（みんなは安全確認は怠るなよ）で、多分即死。最後の記憶がクラクションを鳴らしながら迫るトラックと思いきや、バイクでした。入って当たり所悪ければそれが死因になるから、転ぶだけでも結構危ないんだよ、気をつけようね。

さて、というわけで意識が覚醒したんだけど、・・・動けないね。赤ちゃんとか思つじゃん。ううん、四肢どころか目も開けられないと。なのに、見えてるんだ。・・・なんでだと思つ?

私にもわからん。ついでに、既に転生してから凄く日ひが過ぎている。

とりあえず、視界には平安を思わせる古風な佇まいな御屋敷と、庭。

そうそう、この庭凄いんだよ。なんせ、池がある。それも、人工的な池じゃなくて天然であるように作られてるのがまたいいんだよね。

ついでに私は大きな池の真ん中にある浮島のようなところにいるんだ。頭上には日除けのように松が植えられていて、一応陸地と橋渡しがされている。といつてもまあ、動けないんだけど。

そういうわけで、ここから三百六十度の風景を見るしかできない
んだけど、最近では一つ楽しみが増えた。

一人の男の子がよくやつてくるようになってきたんだ。

その子は、これまた平安時代のような恰好・・・狩衣だけ?を
着て、よくこの庭で一人で遊んでいる。動けたら遊び相手になる
んだけど、残念ながら私は不動の身。大人しく見てるしかないんだ
よね。

そういうえば、もう一つ変わったことがある。なんか、お偉いさん
的な人が屋敷に来たらしく、いつもは静かのがえらく騒がしかつ
た。珍しく庭で宴会みたいなのが開かれたんだけど、これがいつも
とは違った。鳥帽子を被った人が妙にこちらを見てるんだ。えっと、
周りの人曰く陰陽師のようで、今回はこの人が主賓のようだ。

じつとこちらを見たかと思うと、ゆっくりと歩いて傍までやつて
くる。周りにいた人たちも興味が惹かれたらしく、こちらを一斉に
見ている。

「これはこれは。・・・」の岩には御靈が宿つてある

「なんと、・・・妖しか、祟りか!？」

「いや、神聖なものようじや。祀れば守護になるじやうつ

「これぞ正しく鶴の一聲といひよつて、早速私の体には注連縄。
して、小さいが鳥居が設置された。

・・・というより、私、岩ですか! 元人の身で次は岩!・

前世で、私は罪を犯したのですか!?? 覚えがないですよ、神

れま。

やう文句を言つても今世を変えるこはぢりよつもないですけどね。

といつよつ、若の寿命つて何年？ 既に百年は経つてゐ筈ですが・
・・。

まあ、そんなこんなで、今日も今日とて遊びに来る男の子の成長を見ながらのんびりしてます。えつと、確か男の子は十一か十五歳くらいで元服と言つて大人の仲間入りをするんですよね。

ほんとに見た目は日本の平安時代にそつくりなんだけど、違うところもいくつかあるんだよ。なんか、似非つて感じ。

まず、排泄物は垂れ流しではありません。しつかり、上下水道完備とは恐れ入つたよ。でも、電気とかガスはまったくないんだよね。ある意味エコロジー、水も奇麗で自然豊かだし。

あと、ある時、家を囲むように在る柵がある時壊れたんだけど、外に見えた路上はきれいでした。死体とか殺伐とした類ものは一切見受けられなかつたよ。うん、ホント良かつた。マジな平安だと貧富の差やら、文化やらで庶民は苦しい生活アンド死体遺棄だつたらしいよ。

・・・無理、そんな世の中。

時間と言つ概念が薄いせいか、現代よりも時間がゆつたりとしている。ホント、これで動ければ万々歳なんだけどね・・・。

言つても仕方なしと諦めて、今日も元氣よくはしゃぐ少年を見守

る。

そして、どうしてこうなったのだろうか、という状況が目の前で繰り広げられています。

赤々と燃え上がる炎、人々の叫び声。普段の平穏とかけ離れた光景が目の前に広がっていました。

叫びからして、どうやら鬼が出たようである。

・・・ファンタジーですか。

雷鳴が轟き、ここだけでなく、辺り一帯が火の海だ。元が平安時代の建築だから、基本木造住宅。下手すれば、障子など紙なのだから火の手は一気に広まる。まあ、このあたりは水辺だから被害はないけど。

すると、視界の端に見覚えのある少年が目に付いた。齡十二ほど、この家に住んでいる少年だ。日頃整えている服装は少々乱れており、顔には煤がついている。必死に誰かを呼んでいるようで、その目は普段の快活さは身をひそめ、涙で潤んでいた。

・・・喧騒が近づき、何かが来る。

庭の端に、とある姿をみた。確かに棍棒を持つている。絵本に出てくる少々かわいらしいものではなかつたが、禍々しい黒い瘴気を立ち上らせ、頭と思われるところには一本の角。さながら亡者とうべきそれは、まさに鬼である。

わらうと動くと、棍棒を地に引きつい、少年に近づく。

うん、ホラーだね。まるでゾンビだよ。

鬼の目は仄暗い闇を思わせ、そこには心はない、只々生者を見定めるのみ。渴きや恨み、妬みを感じさせる視線に少年は後退するしかない。

よくよく見れば、鬼は増え、少年は取り込まれるように中央による。となると、中央には私がいるわけで……。

すみません、田の前で繰り広げちゃう氣ですか……？

ついに少年は私にしがみつき、逃げ場をなくした。

あーあ、着物濡れちゃってるよ。池に入ればそりゃあ濡れるけど。

鬼は、水に浮くように取り囲んでいる。数は五。

心なしか岩なせいか妙に冷静だ。幾百年と佇み続けたせいか心境は仏か仙人のようなものに近いかもしれない。というよりも、普通に老人だろうか。そんな心持なのだが、この少年は助けたいと思う。りたいと純粹に願つ。

自分より相当幼く、無邪氣で、守られる存在。

意志のある岩が今の自分であるというなら、岩なりに何かしたいと思う。使命感などではなく、命を憐れむかのような、幼き生を守りたいと純粹に願つ。

「・・・何か、簡単に動けたよ」

そう、動けた。

岩だつたときとは違つて、自分といつ輪郭が曖昧でなく、しっかりとした感覚がある。形は人に近いが、耳やら尻尾やらがついているようで、さつきから違和感を感じるが、そのうち慣れる。それよりも、こんな事態なのに冷静である自分が意外だと思つ。

対峙するのは、五体の自分と近くて遠い存在である鬼。いや、靈魂かな。以前の私なら、泣いて喚いて逃げようとするだらうが、どうやら、今の私はそっぽいかないようだ。

「といづよつ、余裕？」

ゆらりと尻尾が揺れる。

どうやら、感情によって自分の意識外でも動くようだ。ついでに、耳も。何故か、こんなオカルトチックなことを目の前にしても、不思議と安心感がある。というより、負ける気がしないと言つた方が近いかもしね。

「とりあえず、実験台になつてもいいね」

首を傾け、笑顔でそう告げると、感情のないと思われた鬼がビクツとなつて、その場から一步下がる。少年は未だ、突然の出来事に呆然と真つ一つに割れた岩の元で座り込んでいる。

「うーん。まあ、これでいいかな」

ゆつくりと自分の周りにいくつかの火の玉を出す。びつやうり自分は狐らしいので、狐火と言つた方がいいかもしね。

「燃えちゃつて」

ゆつたりとした口調だが、動く狐火は弾丸のようなスピードで鬼に迫つていった。勿論、鬼の方も手に持つ棍棒で薙ぎ払おうとするが如何せん、その速さは遅い。狐火は一振りを軽く躱して鬼に突っ込む。

ただの火の玉だが、実際は相手の力、・・・妖力でいいか。で燃え広がる凶悪な性能。いわば、その存在が消滅するまで火の勢いは止まらない。

うん、自分でやつて言うのもなんだけど鬼たちが可哀想だ。この技は自重しよう。と心に決める頃には既に鬼の姿は消滅していた。

「そんでもつて、少年。大丈夫だつた？」

背後で腰を抜かしている少年に声をかける。

「ひとまず自己紹介かなあ、つて私・・・」

はい、名前忘れます。

これまで気付かなかつたけど、かなりショックです。今じゃ、前世の記憶なんてすっかり薄れてるけどそれくらい覚えておきなよ、自分。

「うん、まあ、狐です。君は？」

「え、はい。私は、奇応丸と申します。と言つても、近々元服なので、父上から名を賜りますが」

「それじゃあ、奇応丸くん。この岩の近くにいてね。結界張つておくから」

自分が長年居座つたせいか、そこは妙に自分の力に馴染む空間になつてるから、結界もより強力になると思うし。

「はい、分かりました」

「じゃあ、行つてくれるね。都の鬼狩りにわ」

・・・正直に言おう、自分の力を見余つてた。

ものの三時間くらいで片付いちやつたよ。うん、楽勝。

夜には都全体でお祭り騒ぎになつてた。まあ、人である陰陽師たちも尽力してたから、労いもかねてだろうけどね。

「あー、布団最高、お昼寝最高、一人部屋サイゴー」

なんと奇応丸くんの家に招かれて、居候・・・いや、守護をすることになつた。どうやら私は、狐の中でも位の高い天狐のようだ。名前も七つの尾だから七尾つて名前になつた。

自分で決めた名前もあるけど、アレは真名になつて人に知られると縛られるから呼び名は七尾。まあ、見たまんまで覚えやすいけど

ね。

灯あかり

あ、呼ばれた。行くかな。

奇心丸、・・・いや、元服して賀茂忠行になつたから忠行か。には、真名を教えて、使役できるようになつた。まあ、完全に従わせるには力が足りてないけどね。

さあ、陰陽師の御伴として、今日も頑張りますよー。

(後書き)

登場人物に歴史上にいた人物名がありますが、ご本人とは一切関係なく、名前をお借りしただけですので、ご了承願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0361ba/>

今世は、岩です。

2011年12月31日21時47分発行